同業他社にない、照明設計の力

宮地彌典前会長が「照明事業部」を設置したのは1967年、24歳のときでした。照明を専門に学んだ彌典前会長の照明事業に対する熱意は強く、1970年には株式会社宮地照明を設立。当時、照明は「空間を明るくする」という役割に加えて器具のデザインが重視されるようになり、美しい照明器具が人々の暮らしを彩りました。

そして1990年代からは、光学的な照明器具が中心となり照明器具の意匠だけでなく、どんな光を配置するかという照明設計が重要な時代に。その後は、照明制御の技術が加わり、より高い知識と技術力が必要となりました。

時代に先駆け、卓越した照明設計の技術力で魅力的な照明を作り出してきた宮地電機。照明を愛し、研究を怠らず、新しい試みに挑戦し続けてきた人々が築き上げた確かな強みです。

「照明を文化に」彌典前会長の思いが礎に

取材協力：山本行洋様
（OB 元インテリアデザイン担当室長）

照明への情熱が伝播して

「照明」を宮地電機の強みとする、その基礎を作ったのは彌典前会長です。中学生の頃に舞台照明に出合って光に魅了され、東京電機大学で照明を専攻。東宮傳先生に師事され、光で世の中を楽しく、そして美しく彩ることに夢を持ち続けて来られました。近代照明の歴史はわずか100年余りですが、彌典前会長は24歳で照明事業部を立ち上げてから72歳でお亡くなりになるまでの48年間、ずっと照明を文化にすべく尽力されました。その情熱を受け継ぎ、夢を追い続けてきた結果、今の私があります。

宮地電機に入社したのは本当に偶然で、家庭の事情で大学進学を諦めざるを得なくなり、友人と2つの求人案件を巡ってバトルの結果、私が宮地電機の就職試験を受けることになりました。試験を終えて家に帰り着くまでの間に、当時、株式会社宮地照明の社長だった彌典前会長がわが家を訪れ、両親に「ぜひ入社してほしい」との言葉を残していました。当時、照明器具とは「明るくする道具」であり、照明の知識も関心もない私が知っていたのは家にあったサークラインと20Wの蛍光灯くらいでした。

1976年に入社し、オープンを控えた宮地照明高松支店に配属になりました。ショールームの商品展示では彌典前会長自らの陣頭指揮の中、「3cm右、5cm下！」と指示を受けながら作業を行いました。そこに吊り下げられた照明器具は、どれも美しく個性的な形のものばかりでした。昼は展示作業をしながら、夜は焼肉で英気を養いながら、照明についてたくさんのことを教えてくださり、夢を熱く語っていただきました。彌典前会長には、多くの人に光の楽しさと光の感動を知らしめたい、光とあかりを扱う良い習慣を日本人の暮らしに根付かせたいという夢があり、深い情熱がありました。

インテリアデザイン担当室の誕生まで

入社した年に、藤田進元支店長から「寒川商業建築研究所様に行って、最新のデザインを勉強しなさい」と言われました。そこで、商業デザイン界を牽引する寒川登主宰から、「コンセプトデザイン」を徹底的に叩き込まれました。好き勝手に空間の色や形、光を決めるのではなく、まず最初に空間のデザインコンセプトを決めることが重要で、それを施主様と共有した上で空間を創り上げるとすべてうまくゆくという考えでした。このコンセプトデザインの考え方は私の核となり、その後に担当した案件はすべてコンセプトデザインを中心に創ってきました。

私にとって、寒川商業建築研究所様での時間はすべてが学びでした。たくさんの著名な建築家やデザイナー、照明や建材メーカーが出入りする中で、人のつながりを作れたことも財産です。しかし、何の知識も経験もない若造が、照明設計を任せてもらえるようになるまでは苦労の連続でした。勉強に勉強を重ね、ようやく認めてもらえるようになってから、宮地電機で建築設計事務所を1軒1軒回って照明設計の仕事を開拓しました。そして2006年の経営構造改革【第三創業・Next30】時に、光のデザインを中心としたインテリアデザインの専門部署である、「インテリアデザイン担当室」が設置され、担当室長を拝命しました。

中央：山本行洋様

照明学会で各賞を受賞

彌典前会長が照明学会の四国支部長になられ、当社と照明学会の関係は深くなりました。四国照明賞、照明普及賞など数多くの受賞歴にもつながっています。照明設計の高いノウハウと実績があり、社員のほとんどが照明コンサルタントの資格を有する会社として、照明メーカーをも凌ぐレベルだと一目置かれるようになりました。

当社の照明の仕事は、照明設計から空間全体のデザインへと変遷し、そして現在は人を中心としたヒューマンセントリックデザインで、自動や無線で調色調光などの照明制御を行うようになりました。私たちは、常に照明の最先端研究や開発情報に目を向け、どこよりも早く社会に貢献する空間デザインへと進化を遂げてきました。

仕事は、自分がどのように社会貢献できるかが重要です。社会から必要とされ続けること、社会に認められ続けること、信頼されて任され続けることが、これからの宮地電機にとって必要なことだと考えます。そのためには、時代を先んじて進化し続けることが大切です。